

付加疑問表現の意味論的・語用論的制約

— 日英語の比較を通して —

英語の付加疑問文では、次の典型的な例(1)のように、「付加部の主語と助動詞は、先行する平叙文のそれと一致する」という統語的特徴が広く見られる。

(1) a. The ship has already left, hasn't it?

b. Aaron doesn't speak Arabic, does he?

先行文が複文の場合、付加部は(2a)のように従属節でなく主節と一致するのが普通であるが、例外として、(b)のように補文が I suppose などの動詞で導入される場合、付加部は従属節と一致することが知られている。

(2) a. Aaron says that Beth has gone to Paris, doesn't he / *hasn't she?

b. I suppose you're not serious, *don't I / are you? (Quirk et al. 1985:811)

複文の付加疑問文については、文や述語の意味分析による説明が試みられてきたが、実際に様々な述語について付加疑問形成の可否を調べてみると、先行研究の分析では十分に説明できないケースが見られた。例えば、(3)のように、主語を I とした場合、think と be afraid は、know とその補文の付加疑問化の可否について多少異なっている。また、(4)のように、補文が I think で導入されても、補文の意味内容によっては付加疑問文にできないことがある。

(3) a. I think that Aaron was angry, *don't I / wasn't he?

b. I'm afraid that Aaron was angry, *aren't I / wasn't he?

c. I know that Aaron was angry, *don't I / ??wasn't he?

(4) I think that Aaron hit me last night, *don't I / ?didn't he?

本発表ではこのような現象に着目し、意味論的・語用論的な観点から付加疑問文の特徴について分析・考察する。意味分析の理論的基盤として、中右(1994)の階層意味論モデル(Hierarchical Semantics model)を採用し、その上で、付加疑問形成と述語のもつ叙実性(factivity)(Kiparsky and Kiparsky 1970)との関係について論ずる。また、英語の付加部と、それと類似した伝達機能をもつ日本語の終助詞「ね」とを比較し、神尾(1990, 1998)の「情報のなわ張り(Territory of Information)」の観点から、付加疑問文の機能について語用論的な説明を試みる。

<参考文献>

大曾美恵子 (2005) 「終助詞「よ」「ね」「よね」再考—雑談コーパスに基づく考察—」『言語教育の新展開』ひつじ書房／神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店／神尾昭雄・高見健一 (1998) 『談話と情報構造』研究社出版／中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店／Hooper, J.B. (1975) "On assertive predicates," in J.P. Kimball (ed.), *Syntax and Semantics* 4, 91-124. New York: Academic Press／Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1970) "Fact," in Manfred Bierwisch and Karl E. Heidolph (eds.) *Progress in linguistics*, 143-173. The Hague: Mouton／Lyons, John (1977) *Semantics* 2. Cambridge University Press／McCawley, J.D. (1988) *The syntactic phenomena of English*. University of Chicago Press／Quirk, Randolph et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.